

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24617021

研究課題名(和文) テレビドキュメンタリーにおけるアイヌの表象と他者性の変容に関わる学際的な文化研究

研究課題名(英文) A Research about The Representations of The AINU and Others on TV Documentaries of JAPAN

研究代表者

崔 銀姫 (CHOI, Eunheui)

佛教大学・社会学部・准教授

研究者番号：30364277

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1950年代から2000年代までの凡そ半世紀にわたって日本で放送されたテレビのドキュメンタリー番組における「アイヌ」というエスニシティの言説と表象の考察を通して、日本の現代社会における他者性の構築と変容を考察したものである。特に、本研究は、過去約60年間のドキュメンタリーにおけるアイヌの表象と他者性に関わる変容を、言説的实践や意味の生成、権力的作用といった表象のシステムに注目しつつ、学際的な(メディア研究や歴史学、人類学、民族学等)視座を踏まえたカルチュラルスタディーズの研究方法を用いて、番組を分析・考察するものである。

研究成果の概要(英文)： This is a Research about How Changes of the Representations of The AINU and Others of the Television Documentaries. I investigated the characters of representational and ideological codes of The AINU on NHK's documentaries in Archives from 1950's until 2010 of Japan, and brought to a conclusion.

研究分野：メディア研究(メディア文化論)

キーワード：ドキュメンタリー アイヌ テレビ放送 アイデンティティ アーカイブス 映像文化 エスニシティ

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は、2005年から2006年の2年間には、研究プロジェクト「北海道におけるドキュメンタリー・リテラシー・プログラム開発」(科学研究費補助金：若手B・課題番号：17730314)に取り組み、北海道における民間放送5局のドキュメンタリーの過去約50年間に関する歴史の系譜をまとめた。2007年から2009年は「ドキュメンタリー・リテラシー・プログラム開発とコミュニケーションツール構築」(科学研究費補助金：若手B・課題番号：19730345)の参加型実践研究を行った。また、NHKアーカイブス学術トリアル研究員(2011年4月～2012年3月)として「テレビドキュメンタリーにおけるアイヌ表象と他者性の問題にかかわる考察～戦後60年間の軌跡と変容～」の研究を行った。

## 2. 研究の目的

本研究は、1950年代から2000年代までの凡そ半世紀にわたって放送されたテレビのドキュメンタリー番組における、「アイヌ」というエスニシティの言説と表象の考察を通して、日本の現代社会における他者性の構築と変容を、メディア論や人類学、文化研究、アイデンティティ論、空間論などの学際的な視座から考察したものである。本研究で特に注目した点は、次の三点である。それは、「ドキュメンタリーにおいて日本のエスニシティ(アイヌ)はどのように構築されてきたのか」、「またそれはどのように変化してきたのか」、「そしてそういった変化をめぐる社会的な背景や権力の働き、秩序とはいかなるものだったのか」という問題であった。

## 3. 研究の方法

本研究で用いた研究視座は社会的構築主義とカルチュラルスタディーズであった。その理由は、ドキュメンタリーにおけるマイノリティの表象と言説を研究するためには、「歴史の『真実』は誰によってどのように構築されてきたのか」という社会的構築主義の「歴史の物語叙述の系譜」の視座が最も適合するアプローチであると考えたからである。また、そもそも学際的なパースペクティブの視座として誕生したのもさることながら、研究テーマと研究対象をめぐる事案は、日常的なメディア文化における「力」の政治的磁場の歴史に関わる検討が必要であるため、そういった側面においても、カルチュラルスタディーズのアプローチは特に有効であると考えた。そして研究対象である番組を分析するために用いた研究方法は、ジョン・フィスクの理論と方法によるテレビ番組の読み方(テキストやコード、言説、表象の解釈)のアプローチであった。それは、番組における垂直的相互テキスト性と物語を読み取る方

法である。そして、各々のテキストが想像し創造しようとした他者性の特徴を、歴史的な背景や当時の政治的な動き、社会的な流れ、産業・技術的な変化などの諸ファクターを考慮しながら空間的に考察する方法論であるといえる。

## 4. 研究成果

日本のドキュメンタリーにおけるアイヌの表象の変容には下記のようにまとめられる。

まず、1950年代にアイヌがテーマになったドキュメンタリーとして初めてテレビに登場する『コタンの人たち』を研究対象に、当時の社会現象となっていた北海道観光ブームと「観光アイヌ」の問題に注目した。テキストの中では二つの対立するアイヌ像、つまり「農業アイヌ」vs「観光アイヌ」が作られていた。一方で、日本で初めて人を「覧せる＝展示する」こととなった20世紀初期の博覧会を素材に、特にアイヌとの関連に注目しながら、「観られる」経験の連続性から考える「観光アイヌ」の社会的な意味と、すっきり「観光アイヌ」に変貌したアイヌの「覧せる／観られる」という行為をめぐる歴史的な政治性を検討した。

次に、1980年代に放送された、アイヌをテーマにしたドキュメンタリー史上、記念碑的な番組である『幻のイオマンテ』を中心素材に考察した。初のアイヌのドキュメンタリーが放送された1950年代から凡そ30年後になって創造されたアイヌのドキュメンタリーのテーマは、エスニシティの文化の「再現」への問いであった。それはアイヌだけではなく、日本人、そして今の私たちに、相変わらず続いている課題を想起させながらその核心に迫る番組であった。そして、アイヌの海洋船である「イタオマチブ」の復元の過程を映像に収めた『イタオマチブよ海をめざせ』を取り上げ、アイヌの伝統文化の「復元」における現状と問題について検討した。この番組は全国放送ではなく、ローカル放送であった。一般的なことだが、ローカル放送の番組の場合は、テーマや登場人物、編成などにおいて、全国放送向けよりは「地域密着型」になる傾向がある。今回の番組はそういった背景の「地域密着型」のドキュメンタリーであった。アイヌの伝統文化の復元における内外(過去／現在、歴史／政策、アイヌ／日本人、手作業／機械作業、アイヌ内の世代間／地域間の葛藤、など)の不協和音の事例を通して改めて提起したかった。

続いて、樺太アイヌを中心人物として取り上げた非常に貴重なドキュメンタリーである『失われた子守歌』に注目した。この番組は1990年代初期に制作されたものだが、番組の背景には1800年代半ばから当時までの日本とロシアとの政治的な歴史が強く関係していた。ここでは、「国家とは何か」、「ア

アイデンティティはいかに脆いか」などの問いを通して、マクロな物語によって消されたミクロな物語と、そこで考えなければならない様々な歴史の隙間と社会のシステムの矛盾を考えた。

なお、1990年代にシリーズとして放送された『世界が見つめたアイヌ文化』の第三部『アイヌ太平洋を渡る：アメリカ』を中心的な素材として考察した。その中でも第三部の映像は、9人のアイヌ自らが史上初めてアメリカの博覧会に参加した出来事を紹介しつつ、その一連の歴史的遺産と記憶の今日的な継承を探った内容であった。当時の博覧会にアイヌの展示を図った人類学という新しい知の傲慢さと暴力であった。

以上のように、1990年代のドキュメンタリーにおいては、アイヌの文化を日本国内ではなく、ヨーロッパやロシア、そしてアメリカといった海外からの評価を探ってきた点で、既存のアイヌ文化に対するまなざしとは異なる新たな秩序を構築しようとしていた点で評価できると考えられる。

一方で、2008年に制作されたドキュメンタリー『僕たちのアイヌ宣言』の番組の制作者は、「アイヌのドキュメンタリーを最初から企画したのではない」と語った。これに対照的な若者の像が、時代を遡ってみると、1960年代半ばに制作されたドキュメンタリーの中に構築されていた。『ペウレ・ウタリ～若き同胞』である。そこには、露骨な社会の差別や偏見、侮蔑に苦しむ若いアイヌの人たちがいた。それから約40年の年月が過ぎて再びアイヌの若者の像がドキュメンタリー『僕たちのアイヌ宣言』に創造されていたのである。

以上の6つのテキストにおける他者性に関する言説と表象の歴史的な変容を考察すべく、テキストで読み取られたコードを時代別に羅列した。

時代	章	相互テキスト性による解釈	イデオロギー的コードの解釈
1950 ↓	1	観光アイヌ・差別・非日本人・同化・	単一民族主義、 二項対立的構造主義
↓ テキストの停滞期			
1980 ↓	2 3	イオマンテ・儀礼・儀式と祭り・口承文化・声の文化と文字の文化・  再現と忘却・ イタオマチブ	ポスト構造主義  差延 エスニシティ
1990 ↓	4 5	権太・ディアスポラアイヌ・日・露戦争・流刑者とマイノリティ・博覧会と生身の展示・新聞記事と写真、アイヌ集団の渡米・人類学のまなざし・	オリエンタリズム、 ディアスポラ エスニシティ、 グローバリズム
2000	6	若者・渋谷・アイヌ宣言・ヒップホップとアイヌ語・帰属・多文化	アイデンティティ、 凡庸さの ラディカルリズム

上に再掲した表1は、本文で行われた各テキストの言説と表象の解釈を整理したものである。この表から読み取れる時代的な変容の特徴として、下記のような点が考えられる。

第一に、アイヌ関連のテレビドキュメンタリーの歴史において、1980年代は「転換期」であったことが挙げられる。第二に、1990年代におけるアイヌと世界との繋がりを探る試みの中で見えてきたもう一つの「オリエンタリズム」のまなざしを呈示した点が挙げられる。第三に、二一世紀のグローバル化の進展と人の移動が急増する日本において、これまで認知度の低かった多文化社会に関わる意識が問われたことが挙げられる。第四に、テキストは歴史や社会、そして文化的産物であることを改めて確認できた点が挙げられる。

以上の研究成果から、過去凡そ半世紀にわたって放送されたアイヌを素材としたドキュメンタリーを素材に、送り手が描こうとしたアイヌの表象をめぐって、「各々の時代におけるドキュメンタリーが構築したアイヌのイメージはどのようなものだったのか」、「そういった距離の変化とメディアの表象をもたらした背景にはどのような政治が働いていたのか」、そして「過去のアイヌの放送空間を解釈することの今の時代における意味とは何か」といった問題に焦点を絞りながら、いくつかの関連領域の視座を視野に入れた新たなアプローチから考察ができたかと評価できよう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

崔銀姫(2013)「観光アイヌ」とは何か：まなざしの歴史的な変容をめぐって、社会情報学第1巻2号、93-108pp.

崔銀姫(2012)「帰属意識とは何か～アイヌ/若者/多文化社会～」、社会情報学Vol.16No.2、129-141pp.

崔銀姫(2012)儀礼と記憶：ドキュメンタリー『幻のイオマンテ』を中心に、社会情報学Vol.16No.1、15-28pp.

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

崔銀姫(2015)『テレビドキュメンタリーにおけるアイヌの言説と表象』明石書店、1-347pp.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

崔 銀姫 (CHOI EUNHEUI)  
佛教大学・社会学部・准教授  
研究者番号：30364277

### (2) 研究分担者

友永 雄吾 (TOMONAGA YUGO)  
国立民族学博物館・総合文化研究科・外来  
研究員  
研究者番号：60622058  
備考：削除（辞退）：平成 25 年 3 月 22 日

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：